

俗耳談

市川寬齋口話
山田正脩筆

四篇卷一

特別
45
1420
11



特

門 45
號 1420
卷 11

後多岐日編卷之一



藤浪氏藏



山田正備 筆

一 氣の訓ゆまの物まう十三宵宮氣と子少紀の如也
ハ北方の正位ハ氣の州の畧ハまう多田氏撰す
本語夢母傳よりありておかしき物水の如物え新
とて用ひ物まう水ハ少子陰真成根の玉より陰氣
と好むものとも好むこと子某は秋後物まう十二
宵宮も物まうありて子まうけし物まう
但云陰氣と好むもの成物まうこと子まうけし物まう

昭和二八年
二月二四日
購求

のゆく秋口ももつもの元北方と子とて五石万少記
雁うれ、即方位り名つくとすりも由てし
一 小督とこがしりふ。督かきりかむとす
義教と加の夜とすり。たる督たりしゆり
一 向殿の友名りりと福りふ所と老者の稱りふ
之曰未も我もす某やつり昔所りし老もり
てとんとしりたり致つり。かみりし。福も
殿とよる申前も。老も。い。ま。ま。後とつり
右なりりみりり

一向梳りてむるも木のはらふのふんも舟も
心、このふんも何れも。二ふふ人ごりり
漢字小松の字車釣心とほりてはるる
一 兼談云 欲得先老當温足露首 け話ふれも
もねりり。某幼り。露りり。米そと。被る
秋もみ。寒も。と。九日すり。此乃
之曰小む。是。切。り。ま。あま。は
少の帯よ。と。と。四。十。後。り。の。娘
と。こ。り。も。甲。ゆ。り。也。肉。を。ま。く。未。く。す

とく己の才十ニとて一某より吾を學ばせり其の才
溢るこゝれを多し何れを多しと吾買ひんれん華流し
試し強しと云ふは多し且け流のあまの人の年若の申す
某のあまの偏重多しそ易しと見しと云ふはと云ふ
唯若多しと云ふ也利多しと云ふは

一某のあまの才十ニとて一某より吾を學ばせり其の才
溢るこゝれを多し何れを多しと吾買ひんれん華流し
試し強しと云ふは多し且け流のあまの人の年若の申す
某のあまの偏重多しそ易しと見しと云ふはと云ふ
唯若多しと云ふ也利多しと云ふは

濳 枝之祖又濳かといは彼のあまの申すに依りて
う国にありてくいつのあまの官士も忽具様と過るん
敬とててて顔とててて眼とててとてとてとてとて
あつとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

一 吾のいふは多し子のあまのいふ人のあまのいふ
あり吾のいふは多し子のあまのいふ人のあまのいふ
今とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
人とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
物とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

一 或人一村人かいるる人たし遊て居る者ありしに既中
て遊^遊鉅の句^句と^とく^く一人^{一人}を^を曰^曰ふ^ふを^を獲^獲て^て賓^賓と^と名^名を^を見^見
即^即ち^ちし^しに^に其^其を^を移^移す^すに^に力^力を^を不^不能^能く^くす^すは^は唯^唯に^に此^此を^を見^見
て^て成^成る^る人^人の^の好^好む^む所^所に^に是^是を^を安^安ん^んず^ずと^とは^はな^なら^らず^ずなり^{なり}
そ^その^の情^情心^心の^の心^心を^をま^まか^かあ^あり^りに^に如^如れ^れも^も凡^凡性^性を^をあ^あら^らせ^せい^い
を^を此^此の^の所^所に^に如^如る^る鉅^鉅と^と名^名を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^い
て^てい^いふ^ふに^に此^此の^の心^心を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^い
孟子^{孟子}曰^曰君子^{君子}之^之於^於禽^禽獸^獸也^也見^見其^其生^生不^不忍^忍見^見其^其死^死靡^靡
其^其聲^聲不^不忍^忍食^食其^其肉^肉是^是以^以君^君子^子遠^遠庖^庖廚^廚也^也

一 阿背^{阿背}之^之樹^樹不^不夾^夾焉^焉 杖^杖仁^仁條^條也^也 過^過て^て殺^殺と^と水^水じ^じが^が樹^樹に^に
伐^伐る^る者^者し^しじ^じと^とあり^{あり}や^や曰^曰山^山中^中一^一書^書は^は今^今も^も不^不出^出と
忘^忘る^るこれ^{これ}や^や忘^忘れ^れ多^多る^る所^所也^也 然^然る^るに^にあ^ある^るに^に曰^曰
仁^仁と^とい^いふ^ふに^に既^既杖^杖仁^仁條^條と^と名^名を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^い
と^とい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^い
す^すに^に是^是の^の人^人を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^い
一 甲^甲乙^乙二人^{二人}を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^い
曰^曰九^九の^の人^人を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^い
是^是の^の人^人を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^いふ^ふに^に是^是の^の人^人を^をい^い

高野山にあり

一竹宮に書し載る毒物論、これより先きより後まで、
るれ、
や、
其の、
物、

一後世、
その、
又、
一、

る、
後、

一、
、
中、
と、

一、
、

上の人と欲うと云し藤原の表後后は世の侍
云當時諸葛成何事云只云一句中々も中々也
語と作すも己に申少能まゝありて諸葛友友
其初人の傲慢多かりし是云夫人の言と欲うと
自ら色と欲うと云つる事

一伽婢子と怪絶托る風と我云云岡八列のる小嫌ら
ととあやまて行ふも尾後佐を三列のちよ托る
風とこれあり云巽も怪絶の事四方物来訪もて
後風も其人多しこれと過り人ありと云ふ事

人といふ事と此れも實にこれありと云ふ事
むろり其あつりといふ事と國を今もふ事
は八列のりあり也云他都より云其都
後風の多かりし事と考へて是云穀
北抑のまは風のむく中々も云其都
其人多希う風の多かりし事と云ふ事
いふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
唯めをく云能くも申すも云其都
する一は八列のりありと云ふ事と云ふ事

咲ひししうし記と楽の轉經のやくとすうや毛戸
と合ひし書ふにまうしをいふことなるも非なり
不し知く吻合すうやく地りてそれと傳く實事なり
又くの能事と文と父の師の子あり兄の師の弟を全く同
一なる面兒の市にまうし記記の素般變するものなり
それガ書れ面とんくお對えんやお記といふものなり
すうりとも記亦同は經難のしんくしんくしんく
但又同しけきとんくしんくしんくしんくしんくしんく
花々わら面兒とんくしんくしんくしんくしんくしんく
花々わら面兒とんくしんくしんくしんくしんくしんく

